

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和3年 7月 18日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程1年
氏名	板原 彰宏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
日本モンキーセンター	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
PWS 動物園・博物館実習	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
令和3年 7月 2日 ~ 令和3年 7月 5日 (4日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
日本モンキーセンター学術部キュレーター 新宅 勇太 博士	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>動物園・博物館実習に参加して初めて、動物園側の視点から来園者の行動を観察した。来園者の行動を観察して特に印象に残ったことは、動物に興味があるわけではなさそうな来園者(おそらく、動物好きな方のご家族あるいは友人等)の手持無沙汰感である。そうした来園者に向けて、各動物あるいは各エリアで、動物の何を見ると面白いのかについて映像などの視覚的なメディアを用いた展示をできるといいのではないかと考えた。</p> <p>実習初日の赤見さんの講義の中で、自分はこれまで動物園で感動した経験が(ほとんど)ないことに気づいた。これまで、生きている野生動物だけでなく、映像や写真、さらには文字で表現された動物にまで感動を覚えたことがあるのに、動物園で飼育されている生きた動物を見て感動したことがない。その事実は、自分の中では衝撃的なものであった。では、自分はどのようにして動物園で展示されている動物に心ときめかなかったのか。それは自分と動物との間でつながりが感じられなかったからなのだろうと思う。自分が動物に心ときめく時にはいつもどこかに人の影が見える。例えば、カリブーやムースは狩猟対象であるし、カラス(ワタリガラス)は神話に出てくる。動物園で展示されている動物には、対象動物に来園者が興味を持つきっかけが圧倒的に不足しているのではないと思う。日常生活で見かける動物ではない故、目の前にいる動物が自分とどうかかわってくるのか、そもそもどういう動物なのかが分からない。対象の情報として名前や性別、生息地、基本的な生体情報などはパネルで説明されているが、特に心に残る(興味を抱く)ことはない。見た目が面白いか面白くないか、見た目が派手でなければ一緒に来た人との会話の種にもならず、取り立てて注目するほどの存在でもない。よって、来園者にとっては「いてもいなくても変わらない存在」である動物が非常に多いのではないかとと思う(もちろん動物園好きの方や、特定の個体に強く惹かれているディープな来園者の方が多いことは存じております)。</p> <p>来園者観察をしていて、自分と同じように、目の前にいる動物に対して興味を持つきっかけがないゆえに手持ち無沙汰感を抱いてしまっている来園者が多いということに気づいた。そういう手持ち無沙汰感を抱いている人の隣には大体、動物園にきて楽しそうな人がいた。つまり、特に動物を見たいわけではないが、家族や友人が動物好きだから来たという人が一定数は存在するということである。こういった人たちは、とりあえず何か動物が存在するから目を向けたという程度で、友達の買い物に付き合わされて、興味のないアパレルショップのウィンドウを見せられているのと同じような雰囲気でした。こうした人たちに、目の前にいる動物の何が面白いのかを伝え、話のタネを提供することは動物園のミッションの一つ「教育」の大切な要素であるのではないだろうか。そのために、映像展示を導入すべきではないかと考えた。</p> <p>生息環境といった、その動物種についての説明もそうではあるが、目の前にいる動物を見たくなる仕掛け、例えば、あまり見られない珍しい行動(鳴き声、表情、個体間関係、社会行動など)を紹介したり、ある個体の癖を紹介したり、ヒトっぽいところを紹介したり(来園者観察の中で、動物を見てヒトっぽい特徴や行動について会話しているペアが見られたので)、何を見たらいいのかわからない来園者に、楽しんでいる人と同じ温度で動物園の時間を過ごしていただけるような工夫があるといいのかなと思った。そうした、興味のない人への助け舟は集客にも役立つ。例えば、彼氏あるいは彼女とデートに行っても話のタネがなくて困るカップルは(意外と?)多いようだ。だから、若い男女向けにtwitter、インスタを用いて、「会話の種がなくなるスポット⇒日本モンキーセンター」だと発信することができれば、若い男女の集客アップにつながったりしないかと考えた。</p> <p>今回の実習では動物園を維持することの難しさ、調査研究を並行して行うことの難しさ、予算獲得の難しさ</p>	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

など、動物園を取り巻く環境の厳しさを学ぶことができた。また、動物園を研究で利用する場合は毎日の業務が忙しい飼育員の方々に可能な限り負担をかけないよう、ご協力願うことの大切さを学んだ。あたらしい魅力を発見する研究者と、飼育個体について熟知した飼育員の方々がうまく協力して、動物の面白さや感動を来園者に対して広く発信することができればいいと思う。

最後に、今回の実習中お世話になった飼育員の方に、灰色カラスが日本モンキーセンター周辺をうろついているという情報を教えていただいた。4日の実習後、コンビニまで買い物に出かけたところ、なんと、その灰色カラスと出会ってしまった。アルビノでもなく、確かに灰色であった。白色カラスが汚れて灰色になったわけでもなく、確かに灰色カラスであった。天敵の多い環境であると、灰色の体をしていると黒色に比べて目立つため、早く淘汰されてしまうのかもしれないが、町に住むとなると天敵もいない。逆に、アスファルトの色と同化しないため車で轢かれてしまうリスクが減って長く生き残るのかもしれないなとふと思った。オオシモフリエダシャクで起こった工業暗化の逆でカラスの都市白化が起こると面白いなと妄想していた。

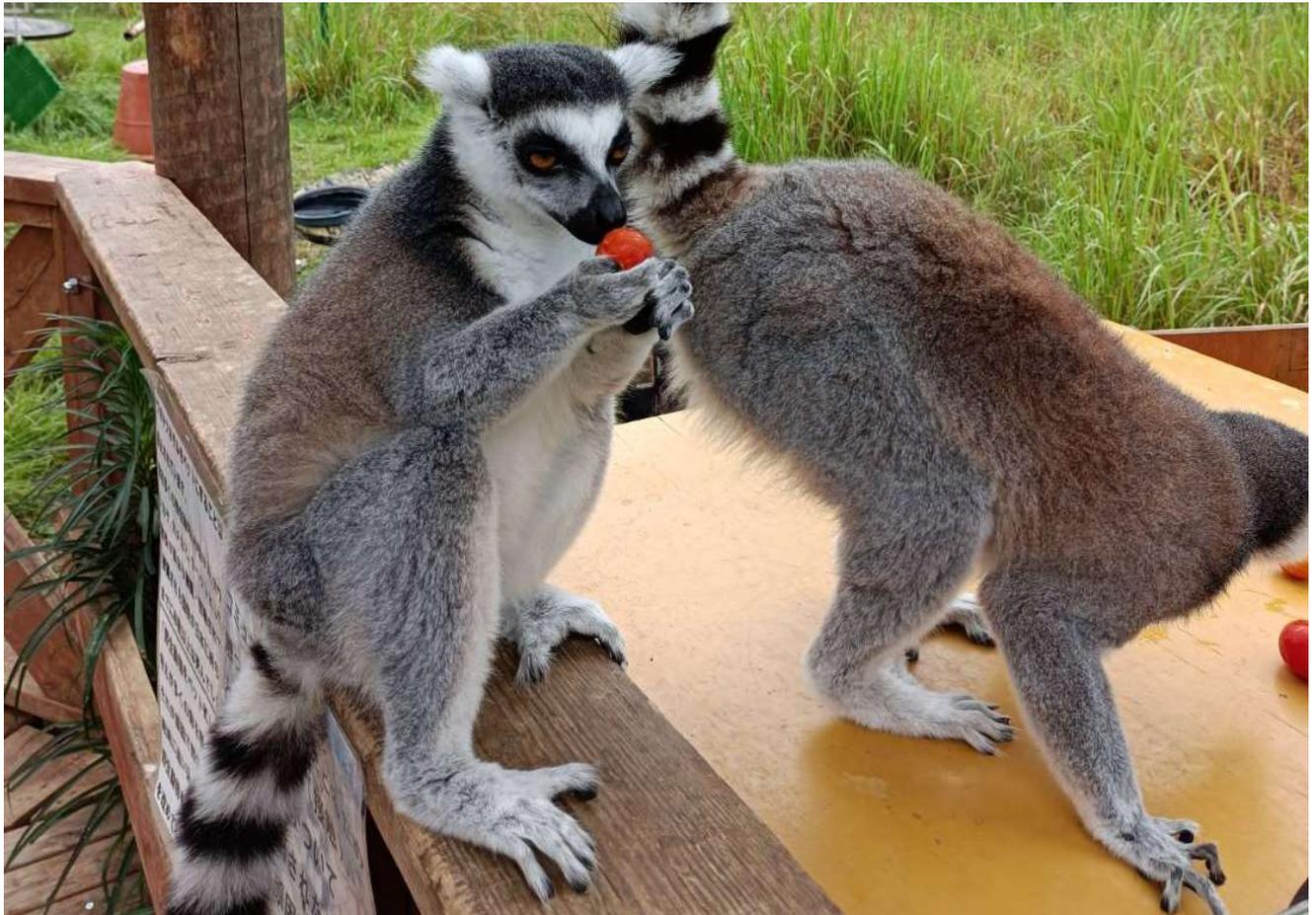


図 1. 今回の飼育実習でお世話になった Wao ランドのワオキツネザル。来園者がワオキツネザルを檻で隔たれることなく観察することができる。比較的近くからワオキツネザルを観察することができ、来園者の滞在時間も長かった。



図 2. 見つけることができた灰色カラス。灰色がまだらにあるのではなく、均一に灰色であるため、白色カラスが汚れたのではなく、灰色の羽を持つカラスであるようである。犬山付近で灰色カラス増加現象が起きれば、工業暗化と並ぶカラスの都市白化について面白い研究ができそうだ。

6. その他 (特記事項など)